

二次元ぷち文庫

試し読み版

◆子ネコちゃんといっしょ◆

お嬢さまと  
いっしょ

番外編

山本沙姫

表紙イラスト：中乃空



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『お嬢さまといっしょ番外編 子ネコちゃんといっしょ』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『お嬢さまといっしょ 麗華とミリアとママい  
いとこどり』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきま  
すと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホー  
ムページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざ  
ん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者  
に譲渡することはできません。



# お嬢さまといっしょ

番外編

◆ 子ネコちゃんといっしょ ◆

山本沙姫

表紙 / 中乃空

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

#### チップちゃん

神宮寺家に住む、アメリカンショートヘアの猫。

#### じんぐう じれいか 神宮寺麗華

神宮寺家の長女。乗馬とバイオリンが趣味のお嬢さま。

#### じんぐう じ 神宮寺ミリア

神宮寺家の次女。元気いっぱいの妹系お嬢さま。

#### じんぐう じ きよこ 神宮寺沙夜子

麗華とミリアの義母。実は恭一の幼馴染み。

#### さるわたりきょういち 猿渡恭一

庶民なのに、麗華とミリアの婚約者候補になってしまった少年。

ごく一般的な家庭に生まれ育つた普通の少年、猿渡恭一。彼が縁もゆかりもない世界的に有名な指揮者、神宮寺良蔵の邸宅を訪れたのは、親友の桜川幸一に頼まれて良蔵の娘二人のうちどちらかを彼の許嫁に選ぶ話を断る使者として、のはずだった。

しかし事態は思わぬ方向に進み、恭一は表向きお嬢さま姉妹のフィアンセ候補として、屋敷に滞在する羽目になる。

これまでの人生で最も熱く甘い夏休みの時間が、今日もすぎていく。

「あら、恭一さん。もうお風呂は済みまして？」

「え？ もちろんだよ。そういうキミは、こんな時間に入っていたのかい？」

とある日の夜遅く、そろそろ日付が変わろうとする頃。歯磨きを終えて洗面所から部屋へ戻る途中の恭一は、廊下で白いバスローブを纏った長い黒髪の美女とバッタリ出会った。気丈そうな印象を醸し出す、鋭角的に引き締まった顎から頬にかけてのラインと目尻が少し吊り上った黒い瞳。それに一七〇センチはありそうな長身に、布越しでも形がよくわかる八〇センチオーバーの釣鐘型バストが目立つ彼女の名は麗華。

神宮寺家の長女で、バイオリンと乗馬をこよなく愛する優雅なお嬢さまである。

一つ屋根の下で暮らしているのだから、風呂上がりの彼女と遭遇するのはよくある事だが、普段よりずっと遅い時間なのが恭一は少し気になった。

「別に大した事じゃありませんわ。友達が貸してくれた推理小説を読み耽つていて、ちょっと遅くなっただけですよ」

「推理小説……ははーん、やつぱり謎解きや犯人当てにハマっちゃったとか？ 意外と庶民っぽいところがあるんだね」

ありがちな理由をすまし顔で語るのがおかしくて、恭一はからかい半分に意地悪な笑みを浮かべながら問いかけてみる。

「ち、違いますわ！ ただ……」

すかさず勝気なお嬢さまは、彼の態度が気に障って反撃してくるものその口調はどこか弱々しい。一瞬鋭い視線を飛ばした黒い瞳も、すぐに目尻が下がっていく。

「ただ、何？」

「その……主役の刑事の親友で、何かと手助けをする探偵があなたに似ていて、何度もピンチに遭うものだから。それで、その……どうなるのか先が気になってしまつて……」

ほんのりと頬を朱に染めながら、麗華はたどたどしく小説にハマったわけを語る。本の中の人物の行く末を、現実のように心配してしまつた事がよほど恥ずかしいらしい。

いつもはキリッとして引き締まつた顔つきの気丈な彼女が、柔らかな表情で照れる姿は何とも可愛らしく、見ているだけで胸がドキドキと高鳴つてしまう。

「え！ ぼ、ぼくに……？」

おまけに自分とよく似た小説の人物の身を案じてくれたのが、まるで本当に自分自身の事を心配してくれたように感じられて嬉しかった。

(ちよつと前まではあんなにツンツンしていたのに……ホント、変わったな、麗華さん)  
出会ったばかりの頃は婚約者候補にしては華がないせいで快く思わず、何かと突っかかってくるに似ていた気丈なお嬢さま。しかし今では、身も心も捧げるほど愛してくれている彼女を、恭一は感慨深げに見つめる。

「なっ、何ですか？ 人の顔ジツと見て……」

凝視されているのに気づいた麗華は、怪訝な顔で彼を見返しながら口を尖らせて、少し呆れたような口調で問いかけてきた。

「い、いや……何でもないよ……」

つい見惚れてしまったのが恥ずかしくて、彼は慌てて両手を顔の前でブンブン振り、何事もないかのようにごまかす。

チリンチリチリチリン……。

するとそこへ、甲高い鈴の音を鳴らしながら迫る者がいた。赤い絨毯の上を弾むように走ってきたのは、両手でスッポリと包めそうなぐらいの大きさしかない生後二ヶ月ほどの雌の子ネコで、グレーの縞模様が可愛らしいアメリカンショートヘア。

「ミュウ、ミュンミュンミュント」

足元にたどり着くなり、踝の辺りに頬を押しつけてくる彼女の名はチップ。ペットと言  
うよりは神宮寺家の三女のような存在。人見知りな性格だが、木に登って降りられなくな  
っていたところを恭一に助けられて以来、姿を見れば必ず寄ってくるほどなついている。

「ははっ、どうしたんだいチップちゃん。あつ、もしかして、だっこしてほしいのかな？  
よしよし……」

対する彼は大の動物好きなだけあって、可愛らしい子ネコに甘えられるのは大歓迎。生  
まれたばかりの我が子をあやす父親のように、優しく呼びかけながら身を屈めて小さな頭  
を撫でると、胸元にヒョイツと抱きかかえる。

「ミュウ〜♪」

するとチップちゃんは嬉しそうに目を細めて、ペロペロと指を舐めてきた。

「ま、またあ……まいったな、こりや……ははは……」

ザラついた生温かいネコ舌の感触は、お湯で湿らせたヘチマのタワシで擦られているよ  
うにくすぐったいし、肌が唾液でベタついてしまう。しかし意思の疎通ができないチビネ  
コが必死に愛情表現をしているのかと思うと、決して悪い気はしない。むしろ気持ちいい  
ものに思えてくる。

「そうそう、そんな感じでいつも連れ歩いている子ネコになつかれていて、胸に抱えなが  
ら事件について推理していましたわ。でも……まさかお友達を庇って、あんな目に遭うな

んて……」

「あんな目に？ な、何？ 結局どうなった……の……」

子ネコを可愛がる自分をやけに神妙な面持ちで見つめながら、悲しげに語るのが気になる、思わず身を乗り出して問いかける恭一はあるものを目の当たりにして言葉を詰まらせた。

(……あ、こ、これは……)

つぶらな瞳に飛び込んでくる、湯上りお嬢さまの大きな胸の谷間。火照って朱に染まった柔肌に薄っすらと浮いた汗が、水晶の粉を振りかけたようにキラキラと輝く姿が美しく、そして艶めかしい。見てはいけないと思いつつも、こっそりと視線を向けてしまう。

「ふふっ、それは……ひ、み、つ、ですわ」

しかし麗華は、今度は見られているのに気づいていないらしく、真剣な表情からコロッと一転して明るく態度を変えると手先で口元を隠して無邪気に笑いながら答える。つきさつきからかわれた仕返しをするかのように。

「えー、イジワルだなあ」

「人に聞くより、ご自分でお読みになられたほうがいいですわよ。いかがですか？」

拗ねた子供のように口を尖らせる恭一に、麗華は優しい口調で薦めてきた。殺人事件などを扱うような血生臭さそうな物語は苦手だが、彼女が本気で心配するぐらい自分に似た

キャラというのが気になる。それに、魅惑的なお嬢さまと共通の話題を持つてみたいとも思う。

「じゃ、じゃあ。ぼくも読ませてもら……」

「ミュ！ ミュミュミュミュン……」

ところがいい雰囲気では話をしているのを邪魔するかの如く、胸元の子ネコは身を起こして、小さな肉球でパタパタと首筋を叩いてきた。

「わわっ、ど、どうしたんだい急に？」

引っ掻かれるかと思つた恭一は、焦つて胸元から暴れるチビネコを落としそうになる。「チップチャーん、どこにいる……あー麗華お姉ちゃん！ 恭一お兄ちゃんと二人で何してるのよー」

そこへ続けて、ヤンチャなチビネコよりやかましい女の子がパタパタと駆け寄つてきた。神宮寺家次女のミリア。恭一に一目惚れして、出会つて早々に「お兄ちゃん」と呼んで抱きついてきたほど人懐っこく元気のいい妹系お嬢さまである。

麗華とは対照的に、身長は一五〇センチに満たず胸も八〇に届かないほどという小柄な身体つきに加えて、ふつくらとした頬のラインやクリクリとよく動く大きな瞳と、まだ幼さの抜けきらない印象のある彼女には、容姿に姉とは大きく違う特徴があつた。

それは金糸のように光り輝く美しい黄金色の髪と、澄んだ南の海を彷彿とさせる青い瞳。

有名なバイオリン奏者だった母から彼女は外見を、姉はバイオリンの腕前を引き継いでいるのだという。

「そんなに騒ぐんじゃありません、さつきまで読んでいた小説について話していただいだけよ  
ねっ、恭一さん」

「あ、うん。そうだよ、ミリアちゃん……」

少しきつい口調で騒ぐ妹を窘めてから話を振られると、別に後ろめたい事があるわけでもないのになぜか自分も叱られているような気になって、しどろもどろになってしまう。

「むー、あやしいなあー。何で本の話をしてるだけなのに、そんなにオドオドしてるの？」  
「ええ、べ、別にオドオドなんてしてないって……あ、そのパジャマ可愛いね……似合ってるよー」

あまり追及されると話が変に拗れそうな気がして、恭一は咄嗟に話を切り替えた。ミリアが纏っているのは、襟に白いフリルの付いた可愛らしいピンクのパジャマ。見た目の幼い彼女の細身の身体には、実によくマッチしている。

「え、そ、そう？ わーい、ありがとっ！ これ一番のお気に入りなのー」

愛しいお兄ちゃんに褒められて、無邪気な金髪少女は嬉しさのあまり長いツイントールを揺らしながら、ピョンピョンとウサギのように飛び跳ねた。華奢な身体が宙に舞うたびに裾がめくれ、可愛らしい小さな臍を頂いたなだらかなお腹が顔を覗かせる。

「ふふふつ、そんなのもちろん」

「Hするに決まってるじゃない、ねー」

ニヤニヤと意味ありげな笑みを浮かべながら、麗華とミリアは、今度は恭一にじり寄ってくる。

「ええっ！　そ、それは……ちよつと……」

「何ですか？　せつかくチップちゃんがこんなに可愛い女の子になったのに、ご不満でも？」

突拍子もない話の展開に、目を丸くして驚く彼に、鋭い視線を送りながら麗華が言い放つ。確かに、人間になったチップちゃんは可愛くて、男として魅力を感じないわけがない。だが実体は子ネコであると思うと、一線を越えるのは気が引ける。

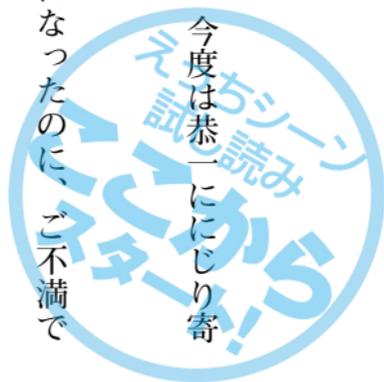
しかし拒否しようにも気丈なお嬢さまに命じられては、さすがに気弱な少年は反論もできず、ただしどろもどろになるばかり。

「そうだよ。だ・か・ら、はいっ！」

さらに間髪いれずに、小柄な元氣娘が勢いよく飛びついてきた。

「わっ！　ち、ちよつと……だ、だめだよミリ……」

抵抗する暇もなく華奢な身体がベッドの上に押し倒され、トランポリンのようにポンポンと軽く跳ねる。無邪気に覆い被さる彼女の小振りな乳房が胸板と重なって、着衣越しに



湯豆腐を押しつけられたような柔らかさや暖かさ、そしてコリコリと心地いい、軽く起立した乳首の当たる感触を伝えてきた。

(ミリアちゃんが、こんなに近くに……)

突如降って湧いた金髪少女との過剰なスキンシップに、恭一の心はますますヒートアップしていく。

「ミュミュ〜ン♪ どうするのミヤ？ どうするのミヤ？」

好奇心旺盛な子ネコちゃんもベッドへ飛び上がり、二人の脇に腰を下ろして様子を窺う。大きな目を爛々と輝かせ、立てた尻尾を右へ左へと抜けてしまうかと思うほどパタパタと激しく振る落ち着きのない姿は、まさに諺にいう「ネコにカツオブシ」状態そのもの。

「い、いやどうするとかと言われても、その……」

しかし、小柄な女の子に押し倒されてしまったみともない姿を凝視されるのは、これから何をされるかわかっている事もあって気恥ずかしく、恭一は火照った顔を耳まで真っ赤に染める。できる事なら彼女を払い除けたいものの、手荒な真似はしたくない。

「さーて、チップちゃん。まずはお姉ちゃんが、キスのしかた教えてあげるね」

「キス!!! ボクの好物なのミヤア〜。わかった、美味しいものを一緒に食べて、もっと仲良くなるのミヤ」

ほんの少し威張ったお姉さんぶった態度で呼びかけるミリアに、チップちゃんは舌をチ

ヨロツと出し、口元に垂れた涎を手の甲で拭きながら答える。

「もうっ、チップちゃんったら食いしん坊なのね。キスっていうのはね、唇と唇を重ねたりお口の中を舐め回したりして、男の子に好きって気持ちを伝える事よ」

いかにも魚好きなのネコらしい勘違いをする妹をからかうと、ミリアは恭一の火照った頬を両手でキュツと押さえた。

「んふふふっ、お兄ちゃんのほっぺた、ふわふわして気持ちいい」

パン生地でも捏ねるかのように柔肌に触れた指先を回しながら、ウツトリとした表情を浮かべて腹上の金髪少女は見つめてくる。甘く潤んだ青い瞳から放たれる視線が艶めかしく、心が吸い込まれてしまいそう。

「待って、ミリアちゃん……」

「むー、ミリアとキスするの嫌なの？ ミリアの事、嫌いになっちゃったのー？」

しかしなんとか理性を保ち、危険な誘惑を振り払おうとするとすかさず彼女は眉間に軽く皺を寄せて、悲しげな口調で不満を漏らしてくる。どことなく悲しげな態度に、どう答えていいかわからない。

「い、嫌とか、そういうわけじゃ、ないけ、どっ！」

プチュツ！

戸惑う彼に構わず、ミリアは半ば強引に口づけしてきた。唇同士が触れあう瞬間、まる

で李を絞り込んだような甘酸っぱい感触が、口いっぱい弾け飛ぶ。

「んくっ……んっんっんっ……き、恭一おにいちゃあん。はぷっ、くりゅっ……」

さらに生暖かな舌が前歯の隙間から滑り込んできて、頬の内肉や歯茎を隈なく舐め回してきたり、舌と舌が蝶結びになりそうなぐらい激しく絡みつけてきたりした。粘液を纏った柔肉が口腔内を撫でるたびに、触れたところからジワジワと心地いい熱さが広がっていく。

その刺激は口内に収まりきらず、まるでペニスを直接舐められているかと錯覚させるほどに股間へ向けて溢れ出す。徐々に膨張しはじめた肉棒の中で、爆竹を鳴らされたような激しい衝撃がバチバチと走った。

（こ、この感じは……まさか、本物……なのか？）

青い目の小悪魔の口づけがもたらす、熱く甘い快感はかつて廊下で押し倒された時に経験したものとまったく同じ。しかも気のせいか、さっきチップちゃんにペニスを舐められた時よりもリアルに感じられて、とても夢や幻とは思えない。

はたしてこれは現実なのか、頭の中に混乱が広がっていく。

「……んんっ、ぷふう……どう、わかったかしら？」

しばらくして、息が続かなくなったミリアは恭一の上から降りると、軽くウインクしてチップちゃんに呼びかける。

「わかったミヤ。お顔を舐めるのと似てるけど、ちよつと違うんだねつ。ボクもやってみるミヤア」

尻尾を振り回しながら無邪気にはしゃいで答えると、ネコミミ娘は姉と入れ替わりに愛しい男の子の上に覆い被さった。

「ミヤア。では、恭一しゃまあ。ボクとキスして、もつともーつと仲良しになるミヤ」

そしてストレートな言葉で呼びかけてからペロリと唇をひと舐めして、ミリアと同じように彼の頬を押さえつけて動きを封じ、顔を近づけてくる。

「んんっ、ち、チップちゃん……はぷうっ……」

金髪お嬢さまに劣らぬ柔らかかな唇が触れた瞬間、ミルクのような甘さと今まで一緒に飲んでいたカツオだしの香りが口の中いっぱい広がった。

「うっ、うーんっ……恭一……しゃまあ……」

さらに姉の手本を真似して、チップちゃんは恭一の前歯を強引に滑り込ませて口腔内を舐め回す。生温かい粘液にまみれた、表面がザラついた柔肉が舌に絡みつき、頬の内肉をくすぐる。その刺激は、脳の中で淫靡な電気信号に変換されて股間へ向けて一気に駆け抜けていく。

すでにミリアが勢いをつけてくれたペニスはますます熱を帯び、亀頭の先端が臍に突き当たりそうなぐらい大きくそり立ってしまった。もし気づかれればまた誤解されて舌で

治療されてしまうからと勃起を抑えてきたが、もう我慢しきれない。

（キスだけでこんななに、感じるなんて……やっぱり、夢じゃないんじゃないか？）

あまりに艶めかしいチップちゃんのディープキスと、それに対する自分自身の反応に、今このひと時がますます現実であるように思えてくる。そして、その思いが強くなるにつれて、口内や股間に纏わりつく快感がより一層激しくなってくるように感じられた。

「うっ、んくっ、んっんっんっ……チツ、チップちゃん……」

いつしか恭一は、さらなる心地よさを求めて積極的にならずから舌を動かし、口腔内を蠢く彼女の舌を追いかけ、絡みつけるようになっていく。

「んんんっ……ぷっ、ぷはあっ……はあっはあっはあっ……ふうううう」

「どうだったチップちゃん。はじめてのキスの感想は？」

しばらくして息切れして離れた妹に、キスを伝授した姉は優しく大人びた口調で問いかける。

「はあっはあっ、口の中がポカポカ暖かくて、舐めてあげるより気持ちよかったミュウ。恭一しゃまはどうでしたミヤ？」

「あっ、その……気持ち、よかったよ……」

大きな黒真珠のように艶やかな瞳で見つめられた恭一は、まるでその中へ心を吸い込まれてしまったかのように、素直な感想を口にした。言ってしまった後で少し気恥ずかしく

込む。

「うわっ！ い、いきなりつつつ……」

小柄な身体に似合わぬ激しいピストン運動は、未熟な膣口の締めつけの強さと相俟って、張りつめたペニスに強烈な刺激をもたらす。まだコリコリとした硬さの残る肉壁が、精液を搾り出すかのように根元から先端へと何度も揉み上げていく。

グチャグチャグチュグチュグチュ……。

「んっ、はっ、はうんっ！ き、恭一お兄ちゃんの、オチン、チン……やつぱり、すごい……すごい！」

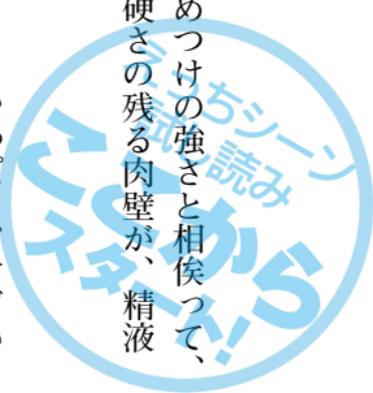
「あうっ、ミ……ミリアちゃん……も、もう……出そう……あ、あれ？」

互いに呼びあいながら腰を振って、快感を高めていく恭一とミリア。ところが、あと一歩で果てそうなところまできて、突如腹上の金髪美少女は立ち上がる。ジュポッと、淫靡な水音を立てて引き抜かれた一物が、天を向いたままの姿勢で手持ち無沙汰にユラユラと揺れた。

「え、な、何で……??」

「はうっはうっはあっ……わ、わかった、チップちゃん？ んんっ、こ、これが……好きな男の子と一番仲良しになれる事、なのよ……」

唐突におあずけを食らって啞然とする恭一をよそに、ミリアは彼のお腹の上からどいて、



隣で見ていたチップちゃんに呼びかける。あくまで彼女は、子ネコの妹に人間として好きな男の子と仲良くなる手本を見せていたにすぎなかった。

「わかったミャア、ミアアお姉ちゃん」

姉と再び入れ替わって恭一を跨ぐと、チップちゃんは縞々ビキニの股布に細い指を引っかけて、クイツと横へずらす。クツキリと縦一文字のクレヴァスを刻んだ、産毛の一本も生えていない褐色の下腹部が姿をあらわした。

(チップちゃんのとって……こんなに、きれいなんだ……)

本来はネコだという事で、毛皮のシヨーツの下も獣毛に覆われている姿を予想していただけに、目の前にあらわれた意外にも清楚な乙女の丘の美しさに惹きつけられた恭一は、まばたきするのも忘れて食い入るように見つめてしまう。

おあずけを食らったシヨックで、少し萎えかけた一物が精力剤でも注射されたかのように、再び活力を取り戻してビクビクと痙攣しはじめる。

「な、何だか……ネコの時と違って、見られるとドキドキするミャア。では……」

股間にチクチクと毬栗が当たるとような視線を感じて、柔らかな頬をほんのりと朱に染めながら、チップちゃんは姉がしたように恭一の上にしゃがみ込もうとした。

「あつ、ちよつとお待ちなさい！」

しかし突然、手持ち無沙汰の様子を窺っていた麗華が止めに入る。

「ミヤ？　ど、どうして？」

「はじめてなんだから、ちゃんと準備運動しなくちゃダメよ」

慌てふためくネコミミ少女の後ろに回り込み、二人羽織りのように覆い被さると、麗華は彼女の左肩に顎を載せて、耳元で囁くように語りかけた。

「じめ、準備運動って……何なのミヤ？」

「それはねえ、男の子がオチンチンを固くして女の子と仲良くなる準備をするように、女の子もちゃんと先にする事があるのよ」

左を向いて不思議そうに首を傾げて尋ねてくるチップちゃんの右手を取り、下半身にもつていきながら麗華は少し艶を帯びた口調で答える。

「ここ……人間の言葉だとおま○こって呼ぶんだけど、割れ目の中を指で弄ったりして濡らしておいて、オチンチンを入れやすくしておくのよ」

「こ、こう？　麗華お姉ちゃん……」

彼女に言われるままに、チップちゃんは人差し指と薬指で秘肉のスリットを割り開く。そして露になった小さな肉真珠を、中指でクリクリと捏ね回しはじめた。肉割れの中に隠れていた肉襞が、露を滴らせながらおすおすおすと顔を覗かせる。

褐色の大地に、赤い薔薇が花開く。愛しい人の雄蕊の訪れを求めて。

(な、何か……すごい……チップちゃんも、麗華さんも……)

肌と肌を触れあわせて、性の手ほどきをする姉と教えに従う妹。二人の姿は仲のいい姉妹というよりは女の子同士のイケナイ関係を彷彿とさせ、恭一はますます興奮していく。股間の一物が震え、開いた亀頭の先割れから透明な先走り汁が止めどなく溢れ出る。

「んっ……ミユウ？ な、何か……変なの……ボクのここ……ううん、ボクのおま〇こ、何だか熱くてジンジンするう……」

「ふふふ、お兄ちゃんに見られながら一人エッチするのって気持ちいいでしょ？ でも、自分だけ夢中になっちゃダメよ」

姉の介入で逆に手持ち無沙汰になっていたミリアが、オナニーに耽りそうになるネコミの妹に、からかい半分で釘を刺す。

「あっ！ いっけなーい。では、恭一しゃまあ。ボクともっと仲良しになるミヤア」

無我夢中で準備運動に勤しんでいたチップちゃんはハッと我に返り、眼下で呆然と待っていた思いい人に呼びかける。目元をほんのりと朱に染め、照れ隠しに短い舌をチョロツと出す姿が、何ともいじらしい。

(……チップちゃん……)

目の前で次々と披露される、ネコミ少女の可愛らしくそして色っぽい姿。その魅力にすっかり取りつかれた恭一の心から。今まで抱いていた心のかえが次々と外れていく。今のこの甘いひとは夢か現実か。人間の姿を借りたとはいえ、子ネコのチップちゃん

と結ばれるのはよいのか悪いのか。そんな事はもうどうでもいい。ただ目の前にいる、褐色肌の可愛い少女のすべてが愛おしくてたまらない。

「う、うん……いいよ。ぼくも、キミと一つになりたい……」

胸の中に沸き立つ思いが、素直に口を突いて出ると、それを聞いたネコミミ娘は嬉しそうに微笑んで頷き、ゆつくりと腰を降ろしていく。そして十分に濡れそぼった肉淫花の中心にそそり立つペニスをあてがい、グツと腰を入れた。

メチユツ！

「んうっ！」

小さな水音を立てて秘肉のスリットが押し開かれる瞬間、亀頭のエラ回りに輪ゴムでも巻きつけられたかのような、強い圧迫感が走る。

「ひぐっ！ こ、こんなに太いの……入らないミヤア〜」

同時に股間から走る引き裂かれそうな衝撃を受けたチップちゃん、思わず顎が天を向きそうならい仰け反って泣き叫ぶ。小柄な少女の身体になった子ネコちゃんには、彼の巨根はやはり荷が重すぎた。

中腰の姿勢にまで曲げたところで、膝の動きが硬直したように止まってしまふ。

「大丈夫、痛いのは最初だけよ」

「そうそう、ちよつとは我慢がいるけれど、すぐにすつごく気持ちよくなれるんだよ」

すかさず二人の姉が左右から挟み込むように寄り添い、苦しげな末っ子をフォローする。痛みを紛らわすために、指先で軽く身体を撫でたり頬と頬をくつつけて捏ね回したり。

「そ、そうなの……ならばボク、頑張ってみるミヤア」

姉達に励まされて、一度は萎みかけた恭一と繋がりたい思いが蘇り、チップちゃんは再び彼の一物を受け入れはじめ。身体を慣らすように少し進んでは止まり、ちよつと引いてはまた止まってその後押し込むという、小さなピストン運動を繰り返して。

「ミュツミュンッ！ もつ、もつと早く……気持ち、よく……んんっ……」

しかし静と動の間隔はだんだんと早くなっていくのが、己が分身在膣内を泳いでいる恭一にはわかっていた。夜明けまでに一緒に気持ちよくなれなかったら、彼女が望む「おつきな思い出」は作れない。

(……もつと、時間があれば……)

自分を愛してくれる女の子が、忙しなく思いを遂げなくてはいけないのが少し切なかった。

グチャグチャヌブヌブグチュグチャグチュグチュ……。

「ミュン！ きつ、恭一しゃまあ。はあつはあつ……ボク、何だかへんな感じなの……お腹の中、ジユクジユクして……ミヤアンッ！」

しかしお月さまの力添えがあったのか、一進一退を繰り返しているうちに早々と膣内を

脈打つ肉棒で押し広げられるのに慣れてきたチップちゃんは、徐々に腰の動きを早めていく。

ゼリーのようになんて柔らかくなつた秘唇の絡みつきと、狭い肉穴の締めつけとが絶妙なバランスを形作り、さらに膣壁の燃えるような熱さも加わって、途方もない快感を敏感な男の筋肉にジワジワと刻み込んでいく。

「うっ、はうっ！　チ、チップちゃんのここ……すぐく、気持ちいい。ギュツと締まって、熱くて、ヌルヌルしてて……はあっ！」

あまりの心地よさに感極まつた恭一は、もっと強く彼女の膣内の感触を味わいたい衝動に駆られて身を起こす。

「えっ！　ミヤアッ！」

そして、テコの原理で入れ替わりにベッドの上に仰向けになったチップちゃんの、ピチピチと張りのある太股を掴んで、M字型に大きく割り開いた。

「チップちゃん！　大好きだよ、チップちゃん。もっともっと、気持ちよくなるう、一緒に……」

背中を大きく反らし、上擦った声で呼びかけると恭一はこれまでの受け身から一転して、激しく腰を使い始める。前後へ素早く揺すったり、尻を大きく「の」の字を描くように回して突き立てた肉棒を彼女のヴァギナの中で振り回したりと、思いつく限りの動きのバ

リエーションを加えながら。

擦れあう秘所の隙間から、グチャグチャと納豆をかき回すような粘り気のある音が響く。「ミュハアン！ 恭一しゃまあ、はあつ、もつ、もつともつと……ボクのおま〇こ、かき回してほしいミャア！」

「い、いくよ……ふうつふうつ、もつと、どんだんいくよ、チップちゃ……あつ、な、何？これは……」

互いに呼びかけあいながら、さらに快感を高めていこうとしたその時、不意にむき出しの臀部が何かで押される。

「はああつ、きつ、恭一さあん……」

「ミアア。もう我慢できないよお……」

妹が愛しいフィアンセ候補の殿方と結ばれる姿を目の当たりにして、我慢できなくなった麗華とミアアが、秘所の疼きを抑えようと恭一の尻に火照ったヴィーナスの丘を擦りつけてきた。

墨の代わりに煮溶かした餡を絡めた筆で習字されるような熱くてこそばゆく、そして気持ちいい感触がスベスベの柔肌の上を走り抜ける。

「ひゃあつ!! きよ、恭一しゃまあ……恭一しゃまのオチン……チンが、ボクの中で暴れてるう」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**